みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

トナカイ遊牧民コリャークの植物利用に関するレポート

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 呉人, 恵, 齋藤, 玲子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5609

北海道立北方民族博物館研究紀要 第14号 Bulletin of
the Hokkaido Museum of Northern Peoples 14:63-92(2005)

トナカイ遊牧民コリャークの植物利用に関するレポート

呉人　恵*・齋藤　玲子**

A Report on Utilization of Plants among the Reindeer-herding Koryak

Megumi KUREBITO and Reiko SAITO

As has often been pointed out, the indigenous peoples in the north make wide use of plants in spite of limited vegetation which consists mainly of bushes, grasses, fern and lichen. In No.13 reindeer-herding brigade which is located in the northernmost part of the Severo-Evensk district, Magadan region, reindeer-herding Koryak make use of a number of plants for sustenance, housing, clothing, medicine, rituals, and amusement. The present paper aims to make an ethnobotanical description of plant use among the reindeer-herding Koryaks in No.13 brigade, based on linguistically exact descriptions of each Koryak plant name along with each plant's biologically exact identity.

1. はじめに

永久凍土に覆われた北方のツンドラ地帯では、限られた植生であるにもかかわらず、植物を有効に生活に取り入れてきたことは、最近の日本人による研究だけでもすでに高柴（1995：103）、齋藤（1995：39）らが指摘しているとおりである。マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区最北の第13トナカイ遊牧ブリガード（以下、第13ブリガードと略する）周辺地域も例外ではない（写真1）（地図）。ここには、グイマツ[1]の喬木を除けば、ハイマツ、ハンノキ類、ヤナギ類、ツツジ類、いわゆる白樺（*Betula*：カバノキ科カバノキ属）

* 富山大学人文学部教授（Toyama University）
** 北海道立北方民族博物館学芸員（Hokkaido Museum of Northern Peoples）

キーワード　コリャーク、ツンドラ、植物利用
Key Words　Koryak, Tundra, Utilization of Plants

などの潅木や、イネ科等の草本、シダ植物、コケ植物、地衣類、また菌類（キノコ）が生育しているが、これらの植物（と菌類）の多くが彼らの生活のさまざまな側面に取り入れられ利用されてきた。

写真１

地図

本稿は、言語学と民族学と専門の異なる呉人と齋藤が、この第13ブリガードにおける植物利用のありようを共同で記述したものである。具体的には、呉人が2004年8月初めから9月初めにかけて第13ブリガードでおこなった現地調査にもとづき作成したレポートに齋藤が民族学的視点から再検討を加え、北方の他民族の植物利用との比較もおこないつつ（注参照）加筆修正したものである。

日本人によるロシア極東地域でのフィールドワークが増えているにもかかわらず、正確な種の同定をともなう社会科学的研究は必ずしも多いとはいえず、特定集団の周辺の自然環境との関係について、とくに生物学的な視点を取り入れて実証的な調査研究を行うことが期待されている（手塚・水島 1997：97）。本稿は、専門の異なる研究者の共同作業によりこうした課題に取り組み、言語学的に正確な植物名称とこれに対応する生物学的に正確な種の同定にもとづき、今後の民族植物学的研究のための基礎的記述を試みたものである。それとともに、本稿はまた、博物館員にとっては現地調査が叶わずとも、現地調査をおこなっている研究者とその収集資料を共有し、またそれぞれの専門にもとづいた知見を共有し合うことによって博物館の資料収集や調査研究を蓄積する可能性を模索した試みのひとつでもある。

コリャークは、オホーツク海や太平洋沿岸で海獣狩猟や漁撈をおこなう海岸定住民コリャークnəməlʔənと、内陸でトナカイ遊牧に従事するトナカイ遊牧民コリャークcawcəvanに大別される。両者の間には植物利用に関していくつかの顕著な相違点が見ら

れる。以下ではこれについても適宜、言及していくつもりである。

マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区は、マガダン州東部に位置して、オホーツク海の北端ギジガ湾に面したエヴェンスク村（北緯61度50分、東経159度15分）に行政の中心を置き、内陸は北にオモロン河までその領域を伸ばしている。大陸性の気候で寒暖の差が激しく、夏は平均気温が摂氏10度を超える一方で、冬の低温が顕著で氷点下40～60度になる。また、年間の降水量も少ない。海岸近くは不連続永久凍土帯で、内陸は連続的永久凍土である。2004年8～9月に呉人が調査をおこなった時点で、第13ブリガードはセヴェロ・エヴェンスク地区の中でもとりわけ気候の厳しい地域であるオモロン河東の支流のひとつケガリ川を中心に500頭ほどのトナカイを遊牧していたが、2005年1月現在は同じくオモロン河西の支流のひとつではあるが、これまでの遊牧地より西に位置し、よりエヴェンスク村に近い大アウランジャ川に向かって遊牧ルートを変更中である。これは地区にかつて3つあったトナカイ遊牧ソフホーズがトナカイの激減により1つに統合されたのを受け、孤立化を避けるためにおこなわれているものである。

なお、本稿のもとになる呉人の現地調査に第13ブリガードで協力していただいたのは、以下の4人の方々である。聞き取り調査だけではなく、いっしょにツンドラや丘を歩き、植物を集め、その利用方法を手にとって教えていただいた。このような得がたい貴重な体験を可能にしてくださったこれらの方々には心から感謝の意を表したい。

写真2　Ajvalan Viktorija Ivanovna（1960年、マニラ生、女性）

写真3　Ityk'eva Vera Ev'jakova（1941年、ヴェルフ・パレニ、トゥルカイ川生、女性）

写真4　Jav'ek Jakov Andreevich（1955年、ヴェルフ・パレニ生、男性）

写真5　Xechchaj Sergej Elijakovich（1950年、第6ブリガード生、男性）

2.　用途別に見るトナカイ遊牧民コリャークの植物利用

山田（1977：251）は、植物が利用される用途を生計維持、住、衣、工芸および特殊用途、薬、儀礼・忌避等、娯楽の7種類に類別しているが、第13ブリガードにおいてもこれらの広い範囲にわたる植物の利用が認められる。表1では、山田（同上）の類別に沿ってコリャークの植物利用状況を表示する。

表1　トナカイ遊牧民コリャークの用途別植物利用状況

生活維持	食物	○	食料、飲料、嗜好品
	生活用具	○	トナカイ橇、トナカイ鞭、ボート、スキー板、魚囲い場
	生活道具	○	植物採集用、道具類の柄、刃物類の鞘
	燃料	○	焚き火、ストーブ用
	飼料	×	
	肥料	×	
	魚毒	×	
住	建材	○	ユルトの枠木、敷き床、魚肉の干し場
	防風	×	
衣		○	ブーツ保温、オムツ
工芸および特殊用途	染料	○	トナカイ毛皮用
	結束	△	自ら製作しないが、かご・編袋等を海岸定住民と交換して入手し使用していた
	その他	○	皮なめし
薬		○	塗り薬、飲み薬
儀礼・忌避等		○	葬儀、トナカイ屠殺、占い、ユルト設営
娯楽	遊び	○	遊具
	観賞	×	

ちなみに、ヨヘルソンの『Koryak』の索引（JOCHELSON 1975［1908］：817-842）からは、35の種が異なると思われる植物と、シダ（fern）、コケ（moss）、ヤナギ（willow/*Salicaceae*）という3つの総称を拾うことができる。一方、本報告では33種について利用法を記すが、今回の呉人の調査ではこの他にも名称等の聞き取りをしたものがある。そのなかには、より植物利用が盛んな海岸コリャークについても調査を行なったヨヘルソンが記録していない植物も含まれる。

以下ではインフォーマントから聞き取ったそれぞれの植物のコリャーク語名とロシア

語、さらに和名、ラテン語の学名をあげ、具体的な用途についても記載する。それぞれの植物情報についてどなたが提供してくださったものかを、「用途」の項目の末尾に名前の最初の姓のイニシャルA、I、J、Xで明記するものとする。また、コリャーク語の名称は本文中、括弧（　）に入れた英語と区別するために括弧に入れずにあげるものとする。学名と和名は『環境調査・アセスメントのための北海道高等植物目録』（伊藤ほか1985～1994）に準拠し、そこに掲載されていない植物については、『北方植生の生態学』（沖津2002）、『朝日百科　植物の世界』（八尋編 1997）『日本の野性植物　コケ』（岩月編2001）、『原色日本新菌類図鑑』Ⅰ、Ⅱ（今関・本郷 1987-89）に基づいた。ロシア語名についてはインフォーマントの聞き取りとともに、便宜のためСмирнов（2002）からも引用した。用途別に記述する植物には通し番号を付す。同じ植物でも部位により用途が異なる場合には（コリャーク語名も異なるため）、同じ番号の後にa，b…をつけ相互に照合しやすいようにする（ただし、部位も同じ場合には通し番号のみ）。

コリャーク語の場合、通常、木本類とキノコ類以外の草本は絶対格複数形で表わされる。したがって、本文中ではこれらの植物名は絶対格複数形であげ、それぞれの植物の項で、単数（sg.）、双数（du.）、複数（pl.）のすべての形をあげる。なお、それ以外の名詞は絶対格単数形で、動詞は不定形であげるものとする。

3.　生活維持

3.1.　食物

3.1.1.　食料

コリャークは植物を食料として利用してきた。以下では、その具体を見ていくが、その前に植物採集に用いる道具類について紹介しておく。

写真6　掘り棒

まず、野生の根茎類の採集にはコリャーク語でwijŋijと呼ばれる鉄製の掘り棒を用いる（写真6）。鈴が吊るしてあることもあるが、これは野生動物が近づかないようにしたり、連れがいるとき自分がどこにいるか相手にわかるようにするためであると言われている。

ナイフ類は採ってきた地下茎・球根を細かく切って干すときに使用する。一方、バラの1種（13）ojpəckocʕoを摘むのには、ハサミwaŋqowalを使い茎の部分を切る。これは次の年も採集できるように根を残しておくための配慮である。

3.1.1.1.　根茎類

食料としての利用では、まず第一に根茎類があげられる。第13ブリガードで採集されているのは、主にコリャーク語でmijmijo, ənatew, jəmŋoと呼ばれる3種類の根である。こ

れらは味がそれぞれ異なり、食べ方も異なる。コリャーク語名について言えば、根茎類一般を表わす包括名はなく、相互に派生関係のない一次語であることから、根茎類に対する個別的かつ具体的な認識のありようがうかがえる。

(1a)

コリャーク語名：mijmij (sg.), mijmijət～mijmijte (du.), mijmijo (pl.)

ロシア語名：щавель

和名：タデ科ミチヤナギ属の1種

学名：*Polygonum* sp.

用途：8月終わりから9月初めにかけて、花が落ちた後で根を集める。秋の終わりならば生のまま、トナカイの生の肝臓といっしょに混ぜて食べる。また、冬用に天日乾燥して保存する。第13ブリガードから東南に200キロほどのシロザケqetaqetが獲れるヴェルフ・パレニ地方では醗酵イクラwillelŋənや乾燥イクラpəʕalalŋən、あるいは冬なら凍ったサケqetəqetaqetと混ぜて食べることもある。苦味が強い。<I> [2)]

写真7　mijmijo

(2)

コリャーク語名：ənat (sg.), ənatet (du.), ənatew (pl.)

ロシア語名：копеечник копеечниковый

和名：カラフトゲンゲ

学名：*Hedysarum hedysaroides*

用途：晩春の6月頃、まだ葉が出ていない時あるいは秋の終わりに掘る。生のままアザラシの脂肪valivalから取った油mətqəmət（以下、アザラシ油）につけて食べる。秋にはきれいに剥いて乾燥させてから冬用に保存する。アザラシ油か凍った生のトナカイの肝臓と食べる。ヴェルフ・パレニ地方でも食するが、mijmijoのようにイクラといっしょに食べることはない。ただし、その理由は不明。甘みがある。<I> [3)]

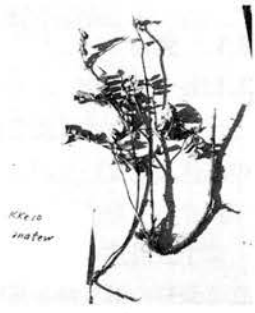

写真8　ənatew

(3)

コリャーク語名：jəmŋəjəm (sg.), jəmŋət (du.), jəmŋo (pl.)

ロシア語名：дийкая картошка, сарана

和名：スベリヒユ科クライトニア属（和名不明）

学名：*Claytonia* sp. (*C. acutifolia* ?)

用途：葉と根をいっしょに夏に集め、乾燥させたものをトナカイの血のスープkewlə?əpaŋaに入れて煮て食べる。また、夏に食するトナカイの胃の内容物jilqəjilを絞って煮たスープjilqə?əpaŋaにも混ぜる。甘みがある。生食はしない。<I> [4]

ヨヘルソンはこのスベリヒユ科植物をコリャーク語でI'natとし、ロシア語で「甘い根」と呼ばれると記述している（JOCHELSON 1908：578）。語形は（2）のカラフトゲンゲに近い。

写真9　jəmŋo

根茎類にはこの他、əjikiw[5]といわれるものがあり、jəmŋoと同様、トナカイの肝臓やサケの醗酵イクラと混ぜて食べるそうだが、第13ブリガード周辺では採集されていない。ただし、第13ブリガードから東北に約100キロに位置するクレスティキ・トナカイ遊牧基地で呉人が2002年冬に調査をした際、ここではəjikiwは生育しており、9月に葉が枯れて根が太る頃に採集して、生のままカワヒメマスkəcawの卵を醗酵させたもの、あるいは醗酵させたトナカイの血wilkiwəlと混ぜて食べるとのことであった。冬用にも保存する。

3.1.1.2.　葉茎

コリャークは根茎類だけではなく、葉茎の部分も食用にしてきた。春、夏のまだ花が咲いていない時に摘んだ葉を、トナカイの心臓、肝臓、肺、蹄、唇などを煮て細かく刻み、新鮮な血液といっしょに混ぜて醗酵させた食品wilwilといっしょに食べることが多い。

（1b）
コリャーク語名：qojawət (sg.), qojawtət (du.), qojawto (pl.)
ロシア語名：щавель
和名：タデ科ミチヤナギ属の1種
学名：*Polygonum* sp.
用途：（1a）mijmijoの葉の部分。qojawtoとは、「トナカイの草」（qoja「トナカイ」，wt「葉」，-o絶複）の意味で、文字通りトナカイが食べる。コリャークは醗酵したトナカイの血wilkiwəlと混ぜて食べる。<I>

（4）
コリャーク語名：wewewtən (sg.), wewewtət (du.), wewewto (pl.)
ロシア語名：кипрей
和名：アカバナ科ヤナギラン属の1種[6]

写真10　wewewto

学名：*Chamaenerion* sp.
用途：春あるいは夏のまだ花が咲いていない時に葉を集めて（1b）のqojawto同様、トナカイの醗酵した血と混ぜて食べる。<I>

(5)
コリャーク語名：cacak (sg.), cacakat (du.), cacakaw (pl.)
ロシア語名：？
和名：キク科の1種
学名：*Compositae* sp.
用途：夏、葉を摘んでそのまま食べる。甘みがある。<I>

写真11　cacakaw

3.1.1.3.　漿果類

第13ブリガード周辺地域では、ウラシマツツジ、コケモモ、クロマメノキ、ホロムイイチゴ、ガンコウランなどの漿果類（ベリー）も豊かに生育する。漿果類についてはコリャーク語の命名のしかたが二分される。すなわち（6a）（7a）（11）は漿果類を表わすʔəvənʔənという包括名からの二次的派生語であるのに対し、（8）（9）（10a）は包括名とは語源的に関係のない一次語である。この違いが、重要度などとなんらかの相関があるかどうかは、これから調べてみたいところである。これらの利用法は以下のとおりである。

(6a)
コリャーク語名：kəlokawtəʔəvənʔən (sg.), kəlokawtəʔəvənʔət (du.), kəlokawtəʔəvənʔo (pl.)
ロシア語名：арктоус альпийский, волчья ягода, медвежья ягода, толокнянка
和名：ウラシマツツジ
学名：*Arctous alpinus*
用途：実は8月末から9月に集めて、kilikilの材料にした。kilikilとは、シロザケ、カワヒメマスなどの魚あるいはトナカイの肝臓を煮てつぶしたものにアザラシ油などを混ぜた料理である。この実以外にもガンコウランやクロミノウグイスカグラ（俗称／アイヌ語：ハスカップ、ロシア語名жимолость、コリャーク語でʔəl'ecʔən (sg.), ʔəl'ecʔət (du.), ʔəl'ecʔu (pl.)）の実と混ぜて食べることもある。実はアザラシ皮製袋pewəlに入れて、地面に穴をあけるか苔の下に入れて保存する。<I>[7]

写真12　kəlokawtəʔəvənʔo

(7a)

コリャーク語名：ɣəjənʔəvənʔən (sg.), ɣəjənʔəvənʔət (du.), ɣəjənʔəvənʔo (pl.)

ロシア語名：брусника

和名：コケモモ

学名：*Vaccinium vitis-idaea*

用途：現在は砂糖と混ぜて食べることが多いが、かつてはそのまま食べた。秋、すでに凍り始めた頃に集める。トナカイ毛皮製太鼓に利用した皮を縫い合わせて作った袋jajajkəl'vəcajocɣənに入れて、屋外の櫃の上で保存する。低血圧に効くといわれている。<I> [8]

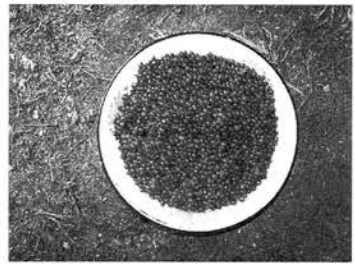

写真13　ɣəjənʔəvənʔo

(8)

コリャーク語名：liŋəl (sg.), liŋlət (du.), liŋlu (pl.)

ロシア語名：голубика

和名：クロマメノキ

学名：*Vaccinium uliginosum*

用途：夏に採集してそのまま食べるか、kilikilに混ぜて食べる。かつては小さなアザラシ皮製袋に入れて冬用に苔の下に保存した。<I> [9]

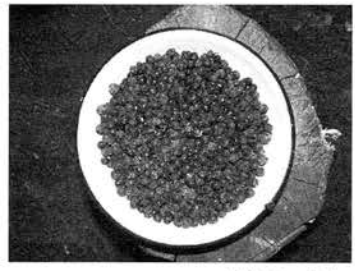

写真14　liŋlu

(9)

コリャーク語名：jittəjit (sg.), jittət (du.), jittu (pl.)

ロシア語名：морошка

和名：ホロムイイチゴ

学名：*Rubus Chamaemorus*

用途：夏に採集してそのまま食べる。利尿作用があるといわれている。<I> [10]

(10a)

コリャーク語名：vəl'ʔaj (sg.), vəl'ʔajte (du.), vəl'ʔajo (pl.)

ロシア語名：смородина красная

和名：ユキノシタ科スグリ属の1種

学名：*Ribes* sp.

用途：夏に集めてそのまま食べるか、最近ではミキサーでつぶして砂糖を混ぜ、お茶請けにする。<I>

写真15　vəl'ʔajo

(11)
コリャーク語名：jacuʕəvənʕən (sg.), jacuʕəvənʕət (du.), jacuʕəvənʕu (pl.)
ロシア語名：шикша сибирская
和名：ガンコウラン
学名：*Empetrum nigrum*
用途：kilikilに混ぜて入れる。水分に富んでおり、夏の暑い時に水分補給のために摘んで食べるといわれている。<I> [11)]

3.1.1.4. キノコ類

キノコの採集はロシア人から受容したものである。第13ブリガードでは、女性や子供たちが暇があると近くの丘に夏、キノコ採りに出かける。ロシア人と同じく、炒めたりスープにしたりして食べる。一部、干して保存することもあるが、ロシア人に比べるとキノコ採りにはそれほど積極的ではない。ツンドラには多様なキノコが生育するが、これらはトナカイが食べるもので、人間が食べるものではなかった。コリャーク語には個別のキノコを表わす語がなく、興奮・幻覚作用のあるベニテングダケwapaq（学名：*Amanita muscaria*）以外はすべて包括名（12）pəʕon (sg.), pəʕonat (du.), pəʕonaw (pl.) で呼ばれていることからもコリャークのキノコに対する関心の薄さがうかがえる<I>。 [12)]

3.1.2. 飲料

コリャークはこれまで市販のアメリカ製のダン（またはタン：磚）茶やロシア製の紅茶を主な日常の飲料としてきたが、それ以外にも野草の茶を飲む習慣がある。今でも紅茶が手に入らない時には煎じて飲むことがある。利用する野草とその方法については以下のとおりである。

(6b)
コリャーク語名：kəlokawtən (sg.), kəlokawtət (du.), kəlokawto (pl.)
ロシア語名：арктоус альпийский, волчья ягода, медвежья ягода, толокнянка
和名：ウラシマツツジ
学名：*Arctous alpinus*
用途：夏から秋にかけて葉を集めて5分くらい沸かして飲む。<I>

(7b)
コリャーク語名：ɣəjənʕən (sg.), ɣəjənʕət (du.), ɣəjənʕo (pl.)
ロシア語名：брусника
和名：コケモモ

学名：*Vaccinium vitis-idaea*
用途：9月初旬～中旬に葉を集める。集めたらすぐにフライパンで炒る。乾いて茶色になったら、沸かしたお湯に入れるかさらに少しだけ沸かして飲む。このお茶をɣəjənʔəcajという。<I>

(13)
コリャーク語名：ojpəckocʔən (sg.), ojpəckocʔət (du.), ojpəckocʔo (pl.)
ロシア語名：шипобник
和名：バラ科バラ属の1種（アンブリオティスバラか）
学名：*Rosa* sp.（*R. amblyotis*?）
用途：花が咲き終わった後、実がなる。その実と葉と茎をいっしょに切ってお茶を沸かす。このお茶をojpəckocʔəcajという。冷まして飲めば暑気払いになる。川のほとりや森に生育する。8月後半に実が熟して自然に落ちたものは拾ってお茶に入れて飲む。皮袋の中に集めて冬用に保存する。<I>

写真16　ojpəckocʔo

(14)
コリャーク語名：ŋecaq (sg.), ŋecaqat (du.), ŋecaqaw (pl.)
ロシア語名：Курильский чай кустарниковый, багульник, пятилисточник кустарниковый
和名：キンロバイ
学名：*Potentilla fruticosa*
用途：花が咲き終わった後、根は抜かずに茎だけを摘み、そのまま5～6分沸かして飲む。苦いので砂糖を入れて飲むといい。<I>[13]

写真17　ŋecaqaw

(15)
コリャーク語名：jiwjicʔən (sg.), jiwjicʔət (du.), jiwjicʔu (pl.)
ロシア語名：иванчай
和名：ヤナギラン
学名：*Chamaenerion angustifolium*
用途：9月初め、花も葉も落ち茎が黄色くなった後、摘んで沸かして飲む。<I>[14]

写真18　jiwjicʔu

(4)
コリャーク語名：wewewtən (sg.), wewewtət (du.), wewewto (pl.)
ロシア語名：кипрей
和名：アカバナ科ヤナギラン属の1種
学名：*Chamaenerion* sp.
用途：近年では葉を集めて乾燥させ、沸かすかポットに熱湯といっしょに入れて飲む。ただし、これはコリャークの伝統的なお茶ではないといわれている。<I>

(10b)
コリャーク語名：vəl'ʕaj (sg.), vəl'ʕajte (du.), vəl'ʕajo (pl.)
ロシア語名：смородина красная
和名：ユキノシタ科スグリ属の1種
学名：*Ribes* sp.
用途：7～8月に葉を集め、乾燥させて、沸かして飲む。<I>

3.1.3.　嗜好品

嗜好品として利用されるものには、以下のものがある。なお、興奮・幻覚作用があるといわれるベニテングダケはこの地方では生育しない。

写真19　wanaw

(16a)
コリャーク語名：wanaw
ロシア語名：лиственничная смола
和名：グイマツの松脂
学名：(*Larix gmelinii*)
用途：噛む。傷口につけてもよいと言われている。<X>

(17)
コリャーク語名：ʕakatkecʕən (sg.), ʕakatkecʕət (du.), ʕakatkecʕo (pl.)
ロシア語名：пахочий
和名：キク科ヨモギ属の1種
学名：*Artemisia* sp.
用途：燃やして灰にしたものをタバコtavaqと混ぜて唇と歯の間にはさむ。柔らかくていいにおいがするので手を拭くといいともいわれている。<I>

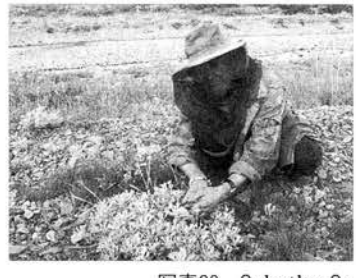
写真20　ʕakatkecʕo

(18)
コリャーク語名：ŋajcacame (sg.), ŋajcacamjət (du.), ŋajcacamjo (pl.)
ロシア語名：？
和名：ニオイシダ
学名：*Dryopteris fragrans*
用途：燃やして灰にしたものをタバコと混ぜて唇と歯の間にはさむ。<X>

写真21　ŋajcacamjo

3.2.　生活用具・生活道具・燃料・建材

3.2.1.　木本類

木本類は葉、枝、幹など部位によって複数の用途をもつ場合がある。たとえばミヤマハンノキは、樹皮は染色用、幹は橇の部品用、枝と葉は儀礼用とそれぞれに用途が異なる。また、ポプラ[15]は同じ幹でも、スキー板やボートなどの生活用具や燃料に利用されるだけでなく、コリャークの伝統的なお守りɣicɣijの素材として使われるなど、儀礼的な機能も担っているといえる。以下では、主に幹の部分が生活用具、生活道具、燃料、建材などに利用される木本類の用途に限定して表で示す。それ以外の用途については、随時、各用途別に見ていくことにする。左端は通し番号である。それぞれの木には和名とコリャーク語名をあげる。木本類の名称は草本類とは異なり、通常、特に複数性を明示する必要がない場合には、絶対格単数形で言及されることが多いので、以下でもこれにしたがうものとする。

それぞれの木材はそれぞれが持つ特質にしたがってきわめて巧みに使い分けられている。この地域で最も汎用性の高いグイマツはまずはなんといっても燃料としての利用価値がきわめて高い。また丈夫な性質上、ユルト（大型の伝統的なトナカイ毛皮製テントで、中に仕切りをつけて複数の家族が同居できる）の枠木や魚肉の干し棚などの建材用に用いられるだけではなく、橇の滑走板などにも用いられる。ハイマツは松脂が豊富なため、燃えつきが早くなおかつ長時間燃えるため薪に利用されるが、それ以外の利用価値はない。walɣil（柔白樺）[16]は、他の木材に比べると柔軟性に富んでおり、橇の木材としての価値が高い。ナナカンバ[17]もまた柔軟性に富んでおり、橇の湾曲部や橇用のトナカイの鞭の柄の木材として適している。ミヤマハンノキは丈夫なだけでなく柔軟性にも富んでいるために、斧などの柄に適している。また、薪としても利用される。ポプラは柔らかくて軽いため、工作しやすく、スキー板やボートの木材として利用される。ヤマナラシ[18]やヤナギ[19]は、柔らかすぎるため建材やその他の造形素材には適さず、薪としてのみ利用される。

また注目しておきたいのは、橇の素材としていくつかの木材が用いられるが、これらはそれぞれ単一で一台の橇が作られるのではなく、それぞれの部位の性質に合わせて素材が

表2　木本類の用途

		ユルト枠木	橇の部品	鞭	薪	魚肉干し棚	刃物の柄	刃物の鞘	スキー板	ボート
16b	グイマツ ɣeɣuw	○	○		○	○				
19a	ハイマツ qəcvoqəj				○					
20	カバノキsp. 柔白樺 walɣil		○							
21	ナナカンバ ŋəcvoŋəc		○	○						
22a	ミヤマハンノキ ɣilleŋ		○		○		○			
23	ポプラ təqəl				○			○	○	○
24	ヤマナラシsp. n'encew				○					
25	ヤナギsp. pilɣəlʔun				○		○			

使い分けられているという点である。たとえば、橇の最も基本的部分は滑走板paktəlŋənであるが[20]、秋の雪のまだ少なく潅木や石が露出している土壌の悪いツンドラには、丈夫なグイマツが適している。冬になると、よく滑るwalɣil（柔白樺）の滑走板に付け替えられる。柔軟性と丈夫さを兼ね備えたミヤマハンノキは橇の湾曲部に利用されるという具合である。

(20)

コリャーク語名：walɣil (sg.), walɣilit (du.), walɣiliw (pl.)

ロシア語名：белая берёза

和名：カバノキ科カバノキ属の1種

ラテン名：*Betula* sp.

用途：橇の部材として用いる。柔らかい白樺といわれる。

(21)

コリャーク語名：ŋəcvən～ŋəcvəŋəc (sg.), ŋəcvət (du.), ŋəcvo (pl.)

ロシア語名：корликовая берёза

和名：ナナカンバ

ラテン名：*Betula nana*

写真22　ŋəcvən～ŋəcvəŋəc

用途：大きいものは橇やトナカイの鞭用に利用。小さなものはユルトの寝具の毛皮の下に敷く。あるいは箒を作るのに使う。

(24)

コリャーク語名：n'əncew (sg.), n'əncevət (du.), n'əncevu (pl.)

ロシア語名：Осина

和名：ヤナギ科ヤマナラシ属の1種

ラテン名：*Populus* sp.

用途：薪に用いる。

(25)

コリャーク語名：pilɣəlʔun (sg.), pilɣəlʔət (du.), pilɣəlʔu (pl.)

ロシア語名：ива

和名：ヤナギ科ヤナギ属の1種

ラテン名：*Salix* sp.

用途：薪に用いる。刀の鞘の材にもする。

写真23　pilɣəlʔun

3.2.2.　草本類

JOCHELSON（1908：629-638）がすでに記述しているように、海岸定住民コリャークは優れたかご製品の作り手である。一方、ツンドラのトナカイ遊牧民コリャークにはかご製品を作る習慣はない。ちなみに第13トナカイ遊牧ブリガードでも植物性の編袋emcejocɣənも植物用の加工具（梳き櫛、槌など）もひとつも確認されなかった。唯一、インフォーマントの1人Itek'eva Vera Ev'jakovaさんによれば、かつては根茎掘りに行くときに1960年に叔母から譲り受けた編袋を使用していたが、いつのまにかクズリに食べられてしまったとのことである[21]。

ちなみに、この地方からヴェルフ・パレニにかけてのツンドラのトナカイ遊牧コリャークは自分たちではやはりかご製品・編袋は作らない。代わりに春にナイフ、アザラシの毛皮の靴底kultalŋənやアザラシ皮製ひもləɣiŋilŋənなどとともにウスティ・パレニ地方の海岸定住民コリャークが作る製品を、トナカイ毛皮、トナカイ毛皮製衣類などと物々交換していたそうである。

JOCHELSON（1908：637）は、トナカイ遊牧民にバスケットを編む習慣がないことについて、「トナカイ遊牧民コリャークの女性は時間がなく、また冬の寒いテントはバスケットを編む作業には適していない」と指摘している。筆者が調査した第13ブリガードの位置する地域は、冬はマイナス60度にも下がる大変寒冷な地域で、編製品の素材となるイラク

サ（*Urtica* spp.）、ハマニンニク（*Elymus mollis*）などが生育しない。また、トナカイ遊牧民コリャークの女性はたしかに大変忙しく、とりわけ大半の時間を皮なめし、染色、縫製など手間のかかるトナカイ毛皮の加工に費やしている。トナカイ毛皮は季節を問わず彼らの衣類として用いられるばかりではなく、住居である夏用のユルトjajaŋaや冬用のテントjuwpalatkanなどにも利用される。女性たちは、新しい衣類の準備だけではなく、ユルトやテントなどの大物の修繕にも多くの時間を費やさなければならないのである。また、上述のように、トナカイを所有しない海岸定住民コリャークに自分たちの加工したトナカイ毛皮製品をバスケットなどと交換したとするならば、相互補完の関係がそこで成り立っており、わざわざ自分たちがバスケットを編む必要がなかったのは容易に想像できる。

なお、植物製の食器・調理具なども第13ブリガードでは確認されていない。

4.　衣

コリャークの植物の衣類への利用は、管見のかぎりでは、オムツや生理用ナプキンと保温のためのブーツの中敷などの補助的なものにかぎられている。

4.1.　オムツ・ナプキン

オムツやナプキンにはコケを利用する。近隣のツングース系のエヴェンは木屑məl'ecʕo (pl.) をオムツに使うとのことであるが、コリャークは使わない。木屑は使った後、臭くなって一回しか使えないが、コケは臭くならないので、乾かして再利用できるからだという。ちなみに、コリャークは木屑を焚き火の火口に使うだけである。利用するコケは用途によって次の2種類が認められている。

写真24　vitʕu

写真25

(26)

コリャーク語名：vitʕən～vitʕəvit (sg.), vitʕət (du.), vitʕu (pl.)

ロシア語名：мох для памперс у детей

和名：チャミズゴケ

学名：*Sphagnum fuscum*

用途：乾燥させた後、新鮮な湿ったコケと混ぜて袋に入れて保存する（理由については不明とのこと）。手や皿などを拭くため

にも利用される。（写真25）<I>

（27）

コリャーク語名：meɣən～miɣəmiw (sg.), meɣət (du.), meɣu (pl.)

ロシア語名：мох для женщины

和名：ヤナギゴケ科の1種

学名：*Amblystegiaceae* sp.

用途：女性の生理用ナプキンとして利用。また、このコケは葬儀の際にも用いられる。すなわち、一切れを死者の口に含ませるとともに、顔をぬらしたこのコケで拭く。使用済みのコケは後に、死者を火葬する際にいっしょに燃やす袋の中に入れる[22]。<I>

写真26　meɣu

4.2.　ブーツの中敷

（28）

コリャーク語名：vəʕajl'əŋən～vəʕaj (sg.), vəʕajte (du.), vəʕajo (pl.)

ロシア語名：сено

和名：イネ科の1種

学名：*Poaceae* sp.

用途：ブーツの底に入れる（vəʕajatək）（写真28）。季節を問わず利用される。夏は歩くのにやわらかく、冬は暖かい。<I>

この草はまた、占いにも利用される。6本を結んで旅行や遊牧ルートなど移動にかかわることを主に占う。写真29で見るように、6本がどこでも絡まらずに丸い円状になるのが一番よいとされている。このような草占いをvəʕajpajɣiŋən（vəʕaj「イネ科」，pajɣiŋ「肩甲骨占い」，-ə- 挿入，-n絶単）という。ちなみに第13ブリガードでは、同様に移動にかかわる吉凶を占う肩甲骨占いも平行しておこなわれているが、草占いを表わす語が肩甲骨占いの派生形であることは、草占いが肩甲骨占いより後で発生した補助的なものであることをうかがわせる。<J>

写真27　vəʕajo

写真28

写真29

(29)
コリャーク語名：jəlŋəvəʔaj (sg.), jəlŋəvəʔajti (du.), jəlŋəvəʔaju (pl.)
ロシア語名：？
和名：イネ科ノガリヤス属の1種
学名：*Calamagrostis* sp.
用途：夏、ブーツの底に入れる。丈夫でこなごなにならない。シロザケの捕れるパレニ地方では、かつてイクラの筋子をこの草に編みこんで乾燥させたが、現在ではイクラは塩漬けにするだけなので、このような利用はもはや見られないということである。

写真30　jəlŋəvəʔaju

5.　工芸および特殊用途

トナカイ毛皮を衣類として利用するためには、まず屠殺した家畜トナカイからとった毛皮の加工作業が不可欠である。この加工作業は主に、皮なめし工程と必要に応じて染色工程とからなる。この2つの工程のいずれにも植物が利用される。以下では、それぞれの工程を記述しながら、その中で植物がどのように利用されているかを見ていくことにする。以下はインフォーマントのI、Aからの聞き取りを整理して記述したものである。

5.1.　皮をなめす enanvatək～jəjitaʔavək

写真31

屠殺して剥いだ毛皮は、まず皮なめしや必要に応じて染色を施して縫製ができる状態にしなければならない。皮なめしに用いられる道具としては、なめし棒wiwijとなめし板enanvenaŋ、さらになめし棒の中央に嵌めるなめし石awətとなめし鉄pəlwəntəʔawətがある。また、なめし剤の削り落としにはナイフが、毛皮の伸展や柔軟化には足が重要な役割を果たす（写真31）。皮なめしに使われるなめし剤には（これを植物と呼んでいいかどうかはわからないが）、伸展のためにトナカイの胃の内容物が、柔軟化のためにトナカイの糞jəʔatが多く用いられる。さらに柔軟化を促進するためにハイマツの針葉tomtom（19b）も使われる。

トナカイ毛皮の皮なめしの手順は以下のとおりである。方法は上にあげた季節別の毛皮の種類にかかわりなくほぼ同じであるといわれている。

1）屠殺して剥いだ皮を、夏ならば地面に広げ、必要ならば丸まらないように回りに石をおいて固定して、1～2日干す。冬ならば、剥いで湿ったままの状態で包んで保存す

る。2月頃に広げて1ヶ月ほど屋外に吊るして干す。

2）乾燥した毛皮をユルトの中に運び入れ、皮を上に毛を下にして敷いておく。踏まれることによって柔らかくするためである。「毛皮を踏む」ことをməcek、「踏まれた毛皮」をməcanalɣənという。これに対して、まだ踏まれていない毛皮はamcakinalɣən（a-...-ki 否定，mca「踏む」，nalɣ「毛皮」，-ə- 挿入，-n 絶単）という。

写真32

3）踏んである程度柔らかくなった毛皮は、まずはなめし石で、次になめし鉄で肉や脂肪を剥がす。毛皮の間や脂肪を剥がすことをkeŋjukという（写真32）。冬に保存しておいた毛皮は、3～4月にこの作業をおこなう。

4）さっと煮たトナカイの胃の内容物を皮の内側に塗りjilqa enajkelek（jilq「胃の内容物」-a 道具格、enajkelek「塗る」）、包んで1日置く。これは毛皮を伸展させるためである。この反芻物は、夏の緑色をしたものだけを使う。夏ならばそのまま新鮮なものを使い、冬ならば夏に地面に掘った穴に保存し（写真33）、必要に応じて取り出して使う。

5）1日たったら取り出して広げて、乾いた部分があったらその部分だけに再び胃の内容物を塗って包んで半時間ほど置く。

6）再び広げて、ナイフで反芻物を削り落とす。

7）その後、なめし石、なめし鉄でなめしたり、足でしごいたりして（ʔaptək「足でしごく」）、乾かす。

写真33

8）さっと煮たトナカイの糞を塗る。これは、毛皮を柔らかくするためである。胃の反芻物同様、夏ならば新鮮な糞を、翌春ならば前年の夏に集めて穴に埋めておいたものを適宜取り出して使う。

9）再び包んで1日置く。

10）毛皮が柔らかくなるまで何度か糞を塗る（写真34）。もし、トナカイの糞だけでは柔らかくならない場合には、さらにハイマツの針葉を女性の尿と混ぜたものを塗る。

11）ナイフかなめし鉄を使って糞を削り落とす。

12）再びなめし石でなめしたり、足でしごいたりする。

13）できあがったものは仕立てるまで包んで保存する。

写真34

なお、チュクチではトナカイ毛皮の加工工程とともに、トナカイ革（レザー）の加工工程も記されている

(BOGORAS 1904-09：220)。しかし、コリャークでは以上の工程でつくられた毛皮がユルトカバーやユルトの帳に利用された後、ナイフで除毛した（n'acek「除毛する」）ものがレザーとして用いられるだけで、チュクチに見られるように除毛後、新たに漂白や燻煙が施されるわけではないので、ここでは記述しない。

5.2.　染色する jomjatək

JOCHELSON（1908：628-629）によれば、コリャークは毛皮や編製品の素材を染色するjomjatəkために、海の泥、湿地のコケの煮出し汁、魚皮から取った膠と混ぜた炭、クランベリーの煮出し汁、柳の樹皮、ハンノキなど多様な染料を利用するとされている。このうち、海の泥とコケの煮出し汁は編み製品の染色に用いられ、後述するように編み製品を作らないこの地域のトナカイ遊牧コリャークには確認されない。また、漿果類の染料としての使用もこの地域では認められない。

この地域におけるトナカイ毛皮の染色には、なんといっても主にミヤマハンノキの樹皮wicwij（22b）が用いられる。ミヤマハンノキは山の斜面に生えるが、これを7月初旬、葉が出始めた頃か、8月末から9月初めに採集し、根元の太い部分から樹皮を集める。根元に近い太い幹の部分を切り取り、ナイフの背や角張った鉄製の棒などで削いでいく（写真35）。ハンノキの樹皮をはがすことをwitajək～winələkという。

写真35

以下が、トナカイ毛皮の染色工程である。

1）集めてきたハンノキの樹皮は細かく砕き、清潔な毛皮の上において日の当たらないところで何度かかき回しながら乾燥させる。清潔な袋に入れてユルトのどこかに吊るしておく。

2）女性の尿を焚き火のそばなどの温かい場所に鋭いにおいがするまで置いておく。酸っぱいにおいになった尿はmətəʔətという。これに細かく砕いて乾燥させた樹皮を浸して何度か混ぜる。尿に樹皮を混ぜることをwijimletəkという。ふたをして暖かい場所におく。手で握ってぼろぼろと樹皮が壊れるようならば完成。このような状態になった樹皮をɣatoŋvalen wicwijという。

3）毛皮を広げ、樹皮を取って力を込めて皮にこすっていく（写真36）。このようにして染色することをjomjatəkという。染色した側を内側に包んで一日おく。うまく染色できない場合には、「尿の主」が病気だと言われる。

写真36

4）翌日、毛皮を広げて手や足を使って伸ばしたり引っ張ったりして、染まり具合を均等にする。乾燥させて縫い始める。染め上がった毛皮はjomjanalɣənという。どんな季節の毛皮でも染色可能だが、冬の2～3月に屠殺した薄い毛皮は特に染めやすいと言われている。また、なめしがしっかりできている毛皮はよく染まると言われている。

ハンノキの樹皮は、この他、仔アザラシや秋に屠殺したトナカイの毛皮で作った房飾りであるpijn'aqの染料としても用いられることがある。この房飾りは帽子などにつけられる。ハンノキ染色については齋藤（1992）が概観しているので、参照されたい。
ハンノキ以外の染料としては、vilulʕu（30）が用いられる。

（30）
コリャーク語名：vilulʕən (sg.), vilulʕət (du.), vilulʕu (pl.)
ロシア語名：（рододендрон золтистый?）
和名：ツツジ科ツツジ属の1種（キバナシャクナゲか）
ラテン名：*Rhododendron* sp.（*R. aureum*?）
用途：トナカイ毛皮を赤く染めるのに使われる。葉だけを集めて細かく砕き女性の尿、木炭と混ぜて染料にする。この方がハンノキより質が高く、硬い毛皮でもやわらかくできるといわれているが、数が少なく貴重なものとされ、多用されない。

写真37　vilulʕu

このほか、薪の炭vəlqəvəlも細かく砕いてハンノキの樹皮の染色液に混ぜて暗い色を出した。ただし、現在ではほとんど使われていない[23]。

6.　薬

薬としては、服用するものや傷などの塗り薬とするもの等があり、次のような植物の利用が確認されている。

（31）
コリャーク語名：ʕakatkecʕən (sg.), ʕakatkecʕət (du.), ʕakatkecʕo (pl.)
ロシア語名：пижма
和名：エゾノヨモギギク
ラテン名：*Chrysanthemum vulgare*

写真38　ʕakatkecʕo

用途：下痢の時に煎じて飲むといいといわれる。<I> [24]

(19c)

コリャーク語名：ɣunewcavəŋ (sg.), ɣunewcavəŋat (du.), ɣunewcavəŋaw (pl.)

ロシア語名：стланик, кедровый стланик

和名：ハイマツの木部

学名：(*Pinus pumila*)

用途：ケガや化膿したところに、樹皮を剥いだその中の白い木部cavəŋをよくかんで塗りつける（写真39）。<X>　また、球果（いわゆる松ぼっくり）の熟していないものを煮たシロップは風邪薬として利用される。実は結核によいといわれている。またハイマツ材（19a）の炭になったものを飲むと胃痛に効くといわれている。さらに、針葉（19b）を入れた熱湯の蒸気を股に当てることによって、産後の子宮の回復に効くといわれている。<I>

写真39　ɣunewcavəŋ

(32)

コリャーク語名：kalaʕələloʕəlŋən (sg.), kalaʕələloʕət (du.), kalaʕələloʕo (pl.)

ロシア語名：？

和名：ホコリタケ属の1種

学名：*Lycoperdon* sp.

用途：kalaʕələloʕəlŋənは「悪魔の乳房」の意味。怪我をしたときに、割って中の粉を傷口にふりかける。また、水虫などによく効くと言われている。<X> [25]

写真40　kalaʕələloʕo

この地域のコリャークは薬としては植物以外に、トナカイの民間医療への利用が顕著である。トナカイの肩甲骨の脂肪をはじめとして内臓の脂肪を胃痛のときに炒って食べたり、肝臓の痛みに胆嚢を利用したり、ひづめを熱しておいて歯痛や胃痛のときに痛む箇所に当てたり、あるいは咳止めに毛のついたままの唇を蒸したものを噛んだりなどした。また、目痛、耳痛、喘息、あるいは洗髪などに人尿が利用されてきたことにも注目したい。[26]

7.　儀礼・忌避等

植物は日常生活においてのみならず、儀礼的にも用いられてきた。筆者のこれまでの調査では、儀礼に用いられる植物として、木本では主にミヤマハンノキ、ヤナギの1種ojkaw、ポプラ、草本ではイネ科のvəʔajoが認められている。それぞれの植物は利用される場面が異なる。なお、儀礼的に利用される植物はそれぞれなんらかの儀礼的な意味を有すると考えられる。また、それが明らかになれば、ある植物が利用されている複数の儀礼間の相互関係が解明できるであろう。しかし、これは今後の考察の課題として、以下ではそれぞれの実際の利用のされ方について記述していくにとどめたい。

(33)
コリャーク語名：ojkaw (sg.), ojkawte (du.), ojkavo (pl.)
ロシア語名：ива
和名：ヤナギ科ヤナギ属の1種
学名：*Salix* sp.
用途：この低木は、トナカイやオオツノジカ（ムース）が葉を食べる。また、枝の部分は冬にウサギの餌になる。一方、この植物はトナカイ屠殺、ユルト設営、投げ輪を保管する際にも利用される。

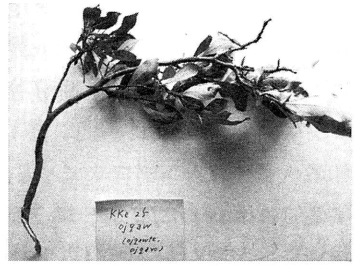

写真41

まず、トナカイを屠殺する際の利用法は以下のとおりである。これは、たとえば生まれたての仔トナカイを屠殺する仔トナカイの儀式qajujuʔaŋaŋや、トナカイが夏の遊牧地に向かって移動を開始する前におこなわれる儀式anoʔewenといった儀礼的な屠殺だけでなく、単なる食糧確保のためと説明される屠殺においても共通して見られる習慣である。

まず、トナカイを絶命させた後、頭を東向きにして横たえたトナカイの頭の下にこの枝を敷く（写真42）。さらにその東側に胃の内容物を注ぐ場所jilqətʔatənəが設置される。これはトナカイを死後の世界に送るための装置、あるいは日の出の方角への供物を置く場所であると説明される。この場所には、夏ならばユルトの枠木を積む小型の櫃jəlqalinaŋが運び込まれ、その脇にトナカイの胃の内容物が注がれ、さらに脳、骨髄、肝臓、腎臓、脂肪などのかけらが置かれる。一方、櫃の上には、トナカイの頭部とともに、この枝を置く。これは死後の世界でトナカイの食料になると説明されている。

写真42

次にユルト設営の際のojkawの利用については以下のとおりである。7月に夏の宿営地

に移動してトナカイ毛皮製ユルトləɣejan～ləɣejajaŋaを建てる際、支柱となる3本の棒tewiの先端と、ユルトの横枠wajewiにこの枝を差し込む。前者には根ごと採ったものを、後者には枝を差し込む。これは無事に夏を迎えたことを祝っておこなわれるしきたりであると説明されている。コリャークは現在、夏に住む毛皮製ユルト以外に、春秋には布製テント、冬には毛皮製テントと住居を住み分けているが、このしきたりがおこなわれるのは、伝統的なユルトだけで、それ以外の住居ではおこなわれない。ちなみに、ləɣejan～ləɣejajaŋaのləɣe-は「本当の」を意味する接頭辞、jan～jajaŋaは「ユルト」を意味する名詞の絶対格単数形である。

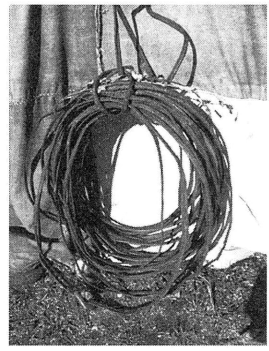

写真43

さらに、ojkawは投げ輪を使わずに巻いて家においておく際、挿しておく習慣がある（写真43）。<x>

(22a)

コリャーク語名：ɣilleŋ (sg.), ɣilleŋti (du.), ɣilleŋu (pl.)

ロシア語名：ольха

和名：ミヤマハンノキ

学名：*Alnus crispa*

用途：ミヤマハンノキ（以下ハンノキと略す）は葬送儀礼の際にいくつかの場面で用いられる。死者を火葬に付した後、次第に衰えていく焚き火のまわりをハンノキの若枝で囲む。これをコリャーク語でməl'val'という。ハンノキで作られたこの円周は故人のユルトあるいは死者の領域を象徴している。したがって、葬儀の参列者はこの円を越えることは禁じられている。また、その横に立てる三つ又の木もハンノキを使う。

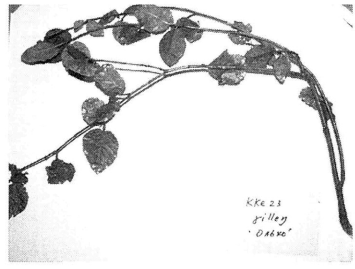

写真44　ɣilleŋ

さらに、火葬場から遠くないところに、ハンノキの若枝で門を立てる。参列者は8の字に回りながらこの門を通る。これは、死者に道がどこに続いているのかわからないようにして、死者の魂が生きている人の後を付いて来ないようにするためである。門を通ったあとは、地面に置いた枝を合わせて門を閉め、全員死者の家に行く。そこには2人の女性が待っていて、ハンノキの低木で来た人たちから死者の魂を取り出す。また。屋根の前にはきれいな水があり、家に入る前に人々は口をすすぎ、水を吐き出す。その後、人々は家に入り、追悼の食事をする。

翌日、日の出前に親族は火葬場に行き、ハンノキの門を開き、そこから薪まで砂を撒いて道を作る。もし金属以外なにも残っていないとしたら、死者はすでにあの世に行ったことになる。もし薪から煙が昇っていたとしたら、すなわち誰かが彼のところに来ず、彼は

最後の法事までその人を待っているのだと考えられる。最後の法事は初雪が降ったあとに営まれる（ハホフスカヤ・呉人 2002：8-10）。

ハンノキは、このほか、ユルトやテントの戸口の両側に2本立てかけられることがあるが、これもməl'val'であると説明された。<x>

(23)
コリャーク語名：təqəl (sg.), təqəlti (du.), təqəlu (pl.)
ロシア語名：тополь
和名：ヤナギ科ヤマナラシ属の1種(いわゆるポプラ)
学名：*Populus* sp.
用途：ポプラは上述のとおり、柔軟性に富んでおり工作に適している。そのような性質を反映してか、コリャークの伝統的な呪具γicγijの製作にも利用される。この呪具の製作のためにポプラの木を切るには、特別な儀礼がとりおこなわれる。以下は、インフォーマントのXが、両親の呪具作りに参加したときにおこなわれた儀式の様子である。

呪具作りは通常冬の12月におこなう。また呪具は男女2体作られる。1969年12月、ポプラの木が2本並んで立っている場所を選んで、そこを投げ輪で囲み、周りに数人の男が立った。その投げ輪の中に女性がガンコウランの実をクフリャンカの裾に入れてやってきて振りまく。この実はトナカイに見立てられている。男たちは「オウオウ」と叫びながら、トナカイを投げ輪の中から逃げさせない演出をする。こうしてから、2本のポプラを呪具の大きさに合わせて切り、その場で呪具をナイフで彫る。その後、トナカイ橇を全速力で走らせて家に帰り（呪具を喜ばせるためと説明されている）、メスと若い種オスを屠殺して、木ocəmŋənとトナカイの角で作った火起こし棒で火をおこす。

ただし、グイマツが材料として用いられることもあり、必ずしもポプラでなければならないというわけではないようである。

8.　おわりに

本稿で対象としたマガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区第13トナカイ遊牧ブリガードは地区の最北に位置しており、気候条件のきわめて厳しい地域であるが、ここでも多様な植物利用が認められた。コリャークは主にカムチャツカ半島のコリャーク自治管区を住地としているが、そこは太平洋にも面しているためより温暖な気候環境にあるといえ、マガダン州よりも植生が豊かである。今後はこのカムチャツカ半島をはじめ、近隣の先住民族との比較をおこなっていく必要がある。また今回の調査では調べることができた植物種の数も限られており、植物相の民俗分類構造にまで踏み込んだ分析はかなわなかった。これも今後の課題として残されている。

謝辞

植物の同定については、斜里町立知床博物館の内田暁友学芸員に協力いただいた。北海道開拓記念館の水島未記学芸員には文献の提供ならびに教示をしていただいた。また、カムチャツカ半島でコリャーク語と同系のアリュートル語の調査研究を進めてこられた永山ゆかりさん（北海道大学大学院）の開設しているМир нымыланов-алюторцев「アリュートルの世界」というホームページhttp://www007.upp.so-net.ne.jp/alutor/top.htmlのРастительный мир алюторцев「アリュートルの植物の世界」で公開されている植物の写真、アリュートル語名、ロシア語名、和名、学名なども、調査の際に参考にさせていただいた。記して感謝申し上げたい。

注

1）インフォーマントの言うロシア語лиственницаは一般名としてカラマツを指すが、植生学を専門とする沖津によれば「マガダン州では、グイマツ—ハイマツ林が広く分布し、それ以外の森林は少ない」（沖津 2002：75）とのことから、ここではグイマツ*Larix gmelinii*とした。

2）ヨヘルソンが採録しているミチヤナギ属の植物（wild sorrel：*Polygonum polymorphum*）の根はコリャーク語でme'tcinと呼ばれ、ロシア語で「苦い根」という名がついているという。学名は異なるが、呉人の聞き取りと同じものかもしれない。

3）北米には同じイワオウギ属の*Hedysarum alpinum*（英名でwild potato, alaska carrot, licorice root, sweet vetchなど）があり、いずれもアサバスカ・インディアンの利用例がある。たとえば、アラスカ南央のタナイナ（あるいはデナイナ）では、その根は最も重要な食用植物のひとつとなっていた。さまざまな調理法が知られ、母乳の飲めない乳児にも与えられた（Kari 1991：126-127）。カナダのセカニでも、生であるいは冬のために干して食べた（Turner 1997：167）。同じくカナダのスレーヴでも食用・薬用として用いられた（Marles et. al. [eds.] 2000：189）。

4）北米ではspring beautyと呼ばれる同属のいくつかの植物の根が食用として利用されている。アラスカからカナダ北部にかけてのイヌイトやアサバスカ・インディアンはでんぷん質を多く含む*C. tuberosa*の球茎を生で、あるいは油につけたり、スープに入れたりして食した（Ager and Ager 1980：35；Marles et. al [eds.] 2000：223）。ブリティッシュコロンビア州の内陸セイリッシュやアサバスカ・インディアンでも*C. lanceolata*は炭水化物として重要な植物であり、味はジャガイモに似てより甘く、蒸したり茹でて食べるほか、他の植物とともに調理した。多く採集できたときは腱・皮ひも・植物繊維の糸などで数珠状につなぎ、煙突や炉の側で燻煙する方法や、土中の穴に保存する方法が知られている（Turner 1997：133-135）。

5）ヨヘルソンは他に根を食べるものとしてクロユリを挙げているが、コリャーク語名は記していない。同じものか。

6）ヤナギランの1種と思われるが、花が大きく、色も濃い。飲料の項（74頁）で、「コリャークの伝統的な茶ではない」と言っていることからも帰化植物の可能性がある。

7）ウラシマツツジの味は平坦で香りも薄いといい（Marles et. al [eds.] 2000：173；Kari 1991：73ほか）、広い地域で可食であることは知られていても、多くの場合あまり積極的に利用されていない。

8）コケモモは北米でも多くの民族が食用としているが、霜にあたるまでは酸味が強く実も堅いため、収穫の時期は遅い（春先までとの記述も）とされる（Kari 1991：67-68；Turner 1997：124；Marles et. al [eds.] 2000：185-186）。タナイナではさまざまな薬用としての利用法が知られており、喉の痛み等に効くという（Kari 1991：67-68）。シベリアのエヴェンキ、ネギダール、オロチなどの諸民族でも広く食されていることが認められている（手塚・水島 1997：102, 104, 109, 112, 113）。

9）クロマメノキもまた、多くの地域（沿海州～サハリン～北米）で食用とされた。一例をあげれば、コユコン地域のアサバスカインディアンでは、最も重要な果実とされ、呼称である*geega*はベリー類の総称としても用いられており、採集に関するタブーも多い（NELSON 1983：54-55）。各地で生食されるほか、乾燥あるいは油に入れて保存した（クレイノヴィチ 1993：106；手塚・水島 1997：104,112；KARI 1991：63-64；TURNER 1997：123-124；MARLES et. al.［eds.］2000：182-183）。

10）ホロムイイチゴもひろく食用にされている。例えばニブフでは夏に生で食べるほか、冬用にアザラシ脂に浸して蓄えた（クレイノヴィチ 1993：106-107）。儀礼用の煮凝り料理「モス」や薬用にも使う（水島・池田 2003：134ほか）北米でも利用された。

11）ガンコウランは、幌別のアイヌは果実を食べると病気にかからないといって多量に採取した（知里 1976：100）。イヌイトでよく食されており、たとえばネルソン島では晩夏に採集し、そのままあるいは「エスキモー・アイスクリーム」（海獣類の油などを攪拌して砂糖や果実を加えた食べ物）に入れた。秋冬のためにアザラシ油に入れて保存した（AGER and AGER 1980：37）。果汁を多く含むため喉の渇きを潤すためにも食されたという記述は、コユコン地域のアサバスカンにも見られる（NELSON 1983：55）。その他のアサバスカ・インディアンや北西海岸インディアンにも多くの利用事例がある（KARI 1991：78-79；TURNER 1995：75，1997：110-111，2004：127；MARLRS et. al.［eds.］2000：171）

12）北方の先住民にとって一般に食用としてのキノコの利用は盛んではなかった。植物の利用が盛んなアイヌでも、薬用のキノコはいくつも知られるが、積極的に食用とされたのはマイタケをはじめとする数種類のみであった（知里 1976：249；更科 1976：55）。

13）スレーヴで茎葉を茶、茎葉根を煎じて体の痛みや時に咳を伴なう熱の時の薬にした。タンニンを多く含むという（MARLES et. al.［eds.］2000：234）。

14）ヤナギランは、広く食用や茶として利用されていた。ユーコン・カスコキウムデルタ地域のイヌイトの間でも食用と、薬効のある茶として飲用された（AGER and AGER 1980：37）。

15）ロシア語によればいわゆる「ポプラ」であり、これはセイヨウポプラを指すものと思われる。

16）沖津（2002：75-83）によれば、マガダン州のグイマツ林床はハイマツ、地衣類、ヒメカンバ*Betula exlis*、ヒメオノオレ*Betula ovalifolia*が主なものであるとの報告がある。ロシア語の「柔らかい白樺」から考えると、ヒメオノオレではなく、ヒメカンバか。

17）*Betula nana*の和名について、沖津（2002：102、165）は「ナナカンバ」としている。

18）ロシア語は一般にチョウセンヤマナラシを指すものと思われる。

19）ロシア語はヤナギ一般を指す言葉であり、ヤナギ属であることは確かだが、それ以上の同定はいまのところできていない。

20）これが橇の最も根幹的な部分として認識されていることは、「橇の修理をする」という動詞が、この「滑走板」を語幹とするtepektəŋək（te-...-ŋ「作る」，pekt「滑り木」，-ə- 挿入，-ə- 挿入，-k不定形）であることからもうかがえる。

21）肉食獣であるクズリが編袋を食べるかどうか疑問である。「くわえて持っていかれた」というような事実が、食べられたと伝わったのではないかと想像される。

22）ただし、呉人がこれまでに見聞したコリャーク式葬儀ではこのコケは使われず、代わりにもうひとつのコケvitʔuが用いられていた。理由については不明。

23）この他、呉人が2005年1月に訪れたセヴェロ・エヴェンスク地区最東に位置するタイゴノス半島タポロフカ村ではコケモモを弱火で煮て、塩を混ぜたものを房飾りの染料に使うこともあるとの報告を受けた。

24）(17)とコリャーク語の名称が同じであるが、その理由は確認できなかった。エゾノヨモギギクは植物体に精油を含み、Tansy oilが抽出される。駆虫や健胃の民間薬として広く利用され、調味料としても利用される。ヨーロッパのヨモギギクはCommon Tansyと呼ばれ、やはり民間薬として栽培・利用されている（堀田ほか 1989：1026）

25）一方、タポロフカ村ではホコリタケはpepeqvəʔajocɣən（pepeq「ネズミ」，vəʔa「草」，-jocɣən「入れ物」）という名称で呼ばれていた。アイヌも同属のキツネノチャブクロを傷口や皮膚のただれに胞子を撒布した（知里 1976：246）。

26）人尿の利用については、三上（1966）が概観している。

参考文献

AGER, Thomas A. and AGER, Lynn Price

1980 Ethnobotany of the Eskimos of Nelson Island, Alaska. *Arctic Anthropology* 17(1) 27-48

AGER, Thomas

1982 Raven's Work. In Fitzhugh, William W. and Kaplan, Susan A. (eds.), *Inua: Spirit World of the Bering Sea Eskimo.* pp. 39-56 Smithsonian Inst.: Washington D.C.

BOGORAS, Waldemar

1904-1908 *The Chukchee.* The Jesup North Pacific Expedition 7, Memoirs of the American Museum of Natural History. Leiden/New York. (Reprinted 1975, AMS Press: New York)

知里真志保

1976 『知里真志保著作集　別巻・分類アイヌ語辞典植物編・動物編』平凡社：東京

堀田満ほか編（世界有用植物事典編集委員会）

1989 『世界有用植物事典』平凡社：東京

今関六也・本郷次雄

1987-1989『原色日本新菌類図鑑』１，２　保育社：大阪

伊藤浩司・日野間彰・たくぎん総合研究所編著

1985-94『環境調査・アセスメントのための北海道高等植物目録』Ⅰ－Ⅳ　たくぎん総合研究所：札幌

岩月善之助（編）

2001 『日本の野生植物　コケ』平凡社：東京

JOCHELSON, Waldemar

1908 *The Koryak.* The Jesup North Pacific Expedition 6. Memoir of the American Museum of Natural History. Leiden/New York. (Reprinted 1975, AMS Press: New York)

KARI, Priscilla Russell

1991 *Tanaina Plantlore: An Ethnobotany of the Dena'ina Indians of Southcentral Alaska.* (1977) Alaska Native Language Center, University of Alaska, Fairbanks

クレイノヴィチ、E. A.

1993 『サハリン・アムール民族誌　ニヴフ族の生活と世界観』（枡本哲訳）法政大学出版局：東京

MARLES, Robin J. et. al eds.

2000 *Aboriginal Plant Use in Canada's Northwest Boreal Forest.* UBC Press: Vancouver

三上次男

1966 「挹婁人の人尿使用の慣習について　―東北アジア諸民族における人尿使用の慣習―」『古代東北アジア史研究』pp.283-310　吉川弘文館：東京

水島未記・池田貴夫

2000 「ロシア・ハバロフスク地方におけるナーナイ、ウデヘの植物利用」『北海道開拓記念館研究紀要』第28号：39-60

2003 「ロシア・サハリン州におけるニヴフの植物利用」『「北方文化共同研究事業」2000－2002年度調査報告』pp.111-136

NAGAYAMA, Yukari

2003 *Očerk Grammatiki Aljutorskogo Jazyka.* Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University (ELPR A2-038)：Suita

NELSON, Richard K.

1983 *Make Players to the Raven: A Koyukon View of the Northern Forest.* The University of Chicago Press: Chicago and London

沖津　進

2002 『北方植生の生態学』古今書院：東京

齋藤玲子

1992 「北方地域における植物性染料、特にハンノキの利用と信仰について」『北海道立北方民族博物館研究紀要』第1号：133-148

1995 「環オホーツク海地域の民族における植物利用の特徴」『環オホーツク海文化のつどい報告書』No.3：39-53

更科源蔵・更科光

1976 『コタン生物記１　樹木・雑草編』法政大学出版局：東京

Смирнов, А. А.

2002 Распространеи Сосудистых Растений на Острове Сахалин. Институт морской геологии и геофизики ДВО РАН: Южно-Сахалинск

高柴修一

1995 「極北地帯のエスノボタニー　―イヌイット、ユッピック社会における植物利用」『第9回北方民族文化シンポジウム報告　ツンドラ地域の人と文化』95-109、財団法人北方文化振興協会：網走

手塚薫・水島未記

1997 「ロシア・ハバロフスク地方におけるエヴェンキ、ネギダール、オロチの植物利用」『北海道開拓記念館研究紀要』第25号：97-119

TURNER, Nancy J.

1995 *Food Plants of Coastal First Peoples.* (Royal British Columbia Museum Handbook), UBC Press: Vancouver

1997 *Food Plants of Interior First Peoples.* (Royal British Columbia Museum Handbook), UBC Press: Vancouver

1998 *Plant Technology of First Peoples in British Columbia.* (Royal British Columbia Museum Handbook), UBC Press: Vancouver

2004 *Plants of Haida Gwaii.* Sono Nis Press: Winlaw

八尋洲東編

1997 『朝日百科　植物の世界』全15巻　朝日新聞社

山田孝子

1977 「鳩間島における民族植物学的研究」伊谷純一郎・原子令三編『人類の自然誌』pp.241-300　雄山閣

リュドミラ・ニコラエヴナ・ハホフスカヤ、呉人恵

2002 「コリャーク葬送儀礼の伝統と変容に関する分析の試み」『北海道立北方民族博物館研究紀要』第12号：1-13

ŽUKOVA, Alevtina N., and Tokusu KUREBITO (eds.)

2004 *Bazovyj tematičeskij slovar' korjaksko-čukotskix jazykov* (Asian and African Lexicon Series No.46). Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.